

三歳児の気持ち

平塚幼稚園の三歳児クラスでは、好きな遊びや友達を見つけてたくさん遊びます。それと同時に、子どもたちにとって幼稚園という初めての集団生活の中で、自分の思いを出し、相手の思いに気付く（相手を意識すること）を大事にしています。どの子にもそのような場を保障するため、二人組（ペア）をつくり、相手の友達と二人で集合して歌ったり一緒に身体を動かしたり、机と一緒に運んでお弁当を食べたりとさまざまな活動に取り組みます。

六月中旬、それぞれが思いを出し合い、人とかかわり一緒に取り組むことの楽しさを感じ

じてほしいと、二人組で「バスごっこ」をすることにしました。一人が帽子をかぶり、フラフープのハンドルを持ち、運転手になって好きな所へ運転します。もう一人は運転手の肩につかまり、お客さんになり、一緒についていきます。どちらが運転手をするかを、二人組で初めての相談をして決めました。とし君—かい君の二人組の記録から振り返ります。

バスごっこ一回目（Tは保育者）

かい 運転手やりたい！
 とし 僕、運転手！

富岡 恵
 （幼稚園教諭）

かい 僕したい！ はーい！ 僕！

とし とし！

T 二人とも運転やりたいんだね。

とし 一緒に運転手やる。

すると、運転手は一人なのですが、二人ともフープと帽子を取りに行き、それぞれ自分で運転手の帽子をかぶり、フープのハンドルを持っていました。

T 今日前は前が運転手さんで後ろがお客さんでバスごっこをするよ。運転手は誰にする？

かい 絶対やりたい！ やらせて！

とし だめ。

かい 僕、運転手したい！

とし だめ。運転手やりたい！

かい 僕もしたい。

お互いしばらく言い合って……ついに他のみんなの相談は終わり、バスごっこを始める

ときが来ました。すると、

かい (泣きだして) わーん！ お客さんがい

ない！

T 本当だね。お客さんいないね。

とし (かに向いて) お客さんなって。

かい やくだ！ 運転したい、乗って。

とし だめ。

と言い合いながら、みんながバスごっこを始めても、お客さんがいままでは発車できないと思つたようで、とし君もかい君も一人ずつバラバラで運転することはせず、みんながバスごっこをしているのを見ました。

私は、何とか話し合いを終わらせて二人もバスごっこをできるようにしようかとも迷いましたが、一人ずつ走り出さなかつた二人の姿から『友達と一緒にやりたいという気持ちが二人にはある』ことを感じ、とし君とかい君は、その日は他の友達のバスごっこをその

まま見ていることにしました。

終わってから、二人がどう思っていたのかを聞いてみると、

とし 今日バスできなかった。

かい できなかった。

とし お客さんいなかったから。

と、言っていました。私は、次にバスごっこをするとき、この二人がどうしようとするかを楽しみにしていました。そして、一週間後。

バスごっこ二回目

二人が、うれしそうに走ってきました。

かい この子（とし君を指さして）が運転手さん。

T この子って？

かい こ・の・子だよ。とし君。（自分の相手を

を必死で教えようとする様子）

とし かい君がお客さんするんだよね。

（二人でニコニコ笑い合う）

T どうやって決まったの？

かい かいが「いいよ」って言ったの。

T どうして？

かい だって、昨日（前に二人でバスごっこをしたとき）二人で言っちゃった。

T 何を言っちゃったの？

とし （笑いながら）「運転手がいい運転手がいいよ」って。

かい かいが泣いちゃって、とし君も泣いちゃって、「お客さんだよ」って泣いちゃって、それでバスできな〜ってなっちゃったの。だから「いいよ」って言ったの。

とし 「いいよ」って言った（言ってくれた）の。（うれしそうに笑う）

かい （とし君の顔を見て一緒に笑う）

T とし君どんな気持ち？

とし （満面の笑みで）うれしい。

かい いいよって言ったらうれしいからね。

とし バス初めてだねえ。

かい うん！（二人で笑い合う）

早速二人でつながり、フープを取りに行き、運転手のとし君は後ろのかい君を振り返っては気にして、かい君もとし君から離れずにバスごっこを楽しむ姿がありました。

この二人のバスごっこでは、お互いに「やりたい」と言うだけでは一緒にできなかったという経験から、どうしたら次はできるかを自分たちで考えようとする姿が見られました。そして、お互い存分に気持ちを出し合い、最後まで自分たちで考えて決めたことで、とても満足そうに納得し、楽しむ姿がありました。その後、とし君が「次はかい君運転手ね」と伝え、かい君が「うん！」と笑う姿も見られ、お互いのやりたい気持ちかわかり合えると、次は代わり合うことを考えていました。

三歳児であっても、子どもたちは経験したことや感じた気持ちから次にどうするかを考えていく力があると改めて感じさせられました。私を含め子どもたちにかかわる保育者、大人が「友達に譲ってあげようね」「順番だよ」と大人の価値観でルールを教えることは簡単です。しかし、子どもたちは自分の気持ちを出し友達に出し、またその相手も気持ちを出すことで、自分だけでなく相手にも気持ちがあることに初めて気が付きます。そしてそこから仲間と楽しく過ごすにはどうしたらいいかを考えていきます。子どもたちにただルールを教えるのではなく、子どもたち自身がさまざまなことを感じ、考えていく力を支え、育てていくことが本当に大切なことなのではないかと思えます。私も子どもたちのさまざまに思いが付くことができる感情豊かな保育者でありたいです。